

新・第4話「赤い背中」

——まさか、背中 동작で、あんな夢を見るとは思わなかった。
その日、30代が始まったころの私。
昼間に動作法のセッションを受けていた。
椅子に坐ったまま、背中に手を当てられた。
ぺこ、ぽこ。ぺこ、ぽこ。当てられた手の部位だけを押したり引いたりする動作
を繰り返しながら、次第にそれだけに集中していく自分がいた。

その夜、夢を見た。
私は、豚だった。
椅子に坐っていた。夢の中でも、坐っていた。
そして、背中がじりじりと熱をもっていた。
ふと、自分の背中を見ると、そこには赤くただれた皮膚があった。
まるで焼けたただれたような、むき出しの傷口——
「これは……私の背中？」
夢の中の私は、驚きながらも、それを知っていた。

そう、これは“痛み”だった。
ずっと見て見ぬふりをしてきた、内面のどこかでくすぶっていた痛み。
誰にも触れられなかった場所。
でも、ほんとうは触れてほしかった場所。
私は、その背中を、自分の目で見ていた。
それは苦しくもあり、どこかで、安堵することでもあった。
ただれた皮膚は、痛みの象徴だった。
けれど、夢の中の空気は、やさしく流れていた。
冷たくて、どこか慈しみを帯びた風だった。